

箴の音

——わが幼時の記憶——

折口信夫

青空文庫

わが車は、とある村に入りぬ。

軒ごとに吊りほせるかけ菜の、あるかなきかの風にゆらめきて、
鶏のこゑ、長閑にきこゆ。

轍におこる塵かろく舞ひ、藪ぎはの緋桃の花、ほろりく散る。

高安の春、いま闌なり。

いつしか、村をはなれつ。からくと軋り行くおほわの右左、みだれ

咲く菜の花遠くつゞきて、蒸すばかり立ちのぼる花の香の中を、
黄なる、白き、酔心地に蝶の飛びては憩ひ、いこひてはとぶ。い
づこともなく、箴のおときこゆ。

見れば、わが行く手にあたりて、常緑樹の森あり。音は、其方よ

り聞え来るなり。

此音を耳にして、われは、ゆくりなくも、旧き記憶をよびおこして、回想の忘れ路をたどりぬ。

恋の淵・峯の薬師・百済の千塚など、通ひなれては、そなたへ足むくるもうとましきに、折しも秋なかば、汗にじむまで晴れわたりにたる日を、たゞ一人、小さき麦稈帽子うち傾けて、家を出でつ。山鳩の、梢に羽ぶく音だに聞ゆる淋しき山路を、「あゝ正成よ」など、高らかにうたひつゝ登る。

この道は、平群の櫟本へ出づるなりとか。

もみぢにはまだしけれど、聞きおよぶ竜田へは二里をこえずと、よべ乳母の語れるに、いでさらばと志しゝなりき。

行けどく山かさなりて、峠なほ遙かなるに、日は、や大阪の海に傾きかゝり、大空は、いよ、青ずみて、行きかふ雲だになし。

夕べの山路には、人かどふ神の出るものよと聞けりしかば、暮れはてぬ程にともと来し道をひたくだりに走せくだる。

山の尾をいくめぐり、谷にそひ、谷をわたり、森のかけ路のをぐらきには、落葉ふむ蹠音にもおびえつゝ、やゝ里近くなりたる処に、山畠の陸稻をかほの、方一反、波うちかへすが中に交りて、大きな柿の木の枝もとをゝに実りたるが、折からの入口をうけて立ちたる。と見れば、その木の本に小家ありて、其内より機おり唄のきこえ来るならずや。

ひそくと忍びよりて障子の穴よりうかゞふに、さだすぎたる女

の、頬にみだれかゝる髪かきもあげで、泣きてはうたひ、唄ひては泣き、何になくらむ、かなしげにうたへるなりき。

様は遠州浜名の橋よ、いまはとだえて音もせぬ。

さては此女、柿主^{ぬし}なりなど思ひつゝ、手ごろの石拾ひあつめ、柿の木にむかひてうちつくるに、二つ三つ四つ、がさくゝと音して、叢にまろび落ちたるを、袂におしいれて、立ち上らむとする時、「たそ」と咎むる声して、障子さとうち開き、見いだしたるは、かの女なりき。

一目見るより、われは背戸のふし垣ふみこえて、走り出でぬ。

後につゞく音するに、顧れば、さをなる顔にほつれ毛うちみだし、細き目に涙たゝへたる柿主の女の追ひ来しなりき。

われは立ちすくみぬ。

女は近よりて、やにはにわが手をぐと把りぬ。とわれは恐れと羞ひとみ

恥しりとに、泣かむとせしも、辛うじて涙かくしぬ。

握られたる手には、女のはげしき呼吸にうち震ふ肩のをのゝきの、
伝ふならずや。

若子、今うち落しゝ物、かへし給へ。

こはき顔して見入るに、われは噤みぬ。

かへし給はずや。

いなく、われは柿はとらじを。

と云ふに、女の肩いよゝをのゝき、把られたるわが手、亦、いた
くふるひぬ。

よし／＼、かへし給はずば、明日にも若子が家人に告げん。

と云ふに、捕へられたる手うちはらひて遁れんとする袂より、紅の珠二つ三つ、ころ／＼と転び出でぬ。

それ見給へ。

と女は冷かに笑みて、わが顔を覗きこみぬ。われはえ堪へず、声あげて泣きぬ。

頬を伝ふ涙はら／＼、逃げ下りつ。

裾曲を流るゝ里の小川の板橋に立ちて、ふりかへりぬ。

見上ぐれば、靄こめたる山畠の小家には、早や灯きらめきぬ。

かすかにきこゆるは箴うつ音。

家にかへれば、乳母は、わがかへりおそきを案じわびて、門にたゝ

ずみ居たりき。

ありし事は、小さき胸一つに秘めて、其夜は早く寢床にまろび入りぬ。

其夜の夢は、千塚ちづかの極尾はつをの神のあらはれて、われに貸しおきつるいはひべ斎い瓮はをかへせ、とせめしなりき。

夢さめて、われは、かの女は塚の神ならざりしかなど思ひて、暗き寢床の内に、ひとと乳母の身により添ひぬ。

明くる日、柿うりの女、入り来ぬ。

われも欲しければとて、門へ出でんとせしも、其女の声を聞きて、たちすくみぬ。

乳母は、幾度かわが名をよびつ。されど、われは、はなれ家にか

くれて、いらへもせざりき。

やゝして柿売りのかへりし頃、母屋に来て、堆く、くづるゝばかりうみたる、赤く大いなるが盆に盛られたるを見し時、其は齋瓮の埴の赤珠にあらずや、とたづねて、

若子は、ねおびれたりや。

と嗤はれぬ。たとひ其時には、昨日の恐しかりしをも忘れて、貪り喰ひつれど。

されど、われは今もなほ、其齋瓮にあらざりしかを疑ふなり。

ふと心づけば、車は若江の邑の畷にかゝれり。

道のかたへなる石ぶみにぬかづきて、重成の靈に、十年ぶりの今日をあひをよろこぶ。

また車に上る。恩智川の堤は、見え初めぬ。かのかげろひ立てる堤をこゆれば、わがめざしたれつつ、十年の月日を過し、里親の家も見ゆるなるべし。山畠の機おり女は、今も、まさきくありや。

前路遠くして、わが行く道、なほ遥々えうえうたり。

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆25 音」作品社

1984（昭和59）年11月25日第1刷発行

1999（平成11）年4月30日第17刷発行

底本の親本：「折口信夫全集 第三十巻」中央公論社

1968（昭和43）年4月初版発行

入力：門田裕志

校正：多羅尾伴内

2003年12月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

箴の音

——わが幼時の記憶——

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 折口信夫
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>